

農水省が需給見通し提示
来年 6 月末在庫 246～283 万ト
（政）買い戻しも需要減で拡大

農水省は、2 日に東京・霞が関で開いた食料・農業・農村政策審議会の食糧部会（部会長＝中嶋康博・日本栄養大学教授）において、令和 7／8 年（7 年 7 月～8 年 6 月）の需給実績と 8／9 年の主食用米等の需給見通しを玄米ベースで示した。8 月 15 日現在の令和 8 年産水稻の作柄概況から「十分な米穀の供給量が確保される」と見通した上で、7 年産を対象に備蓄米 21 万トを買い戻すことを組み込んだ。来年 6 月末に過去最大規模の 304 万トものの民間在庫が発生する見込みだったところ、246 万～283 万トに抑えられる見通しを示した（下表参照）。

主食用米等需給の令和7／8年実績と8／9年見通し（万t、玄米ベース）

令和7年6月末民間在庫量	A	155	今回の政府 備蓄米の 買い戻し (21万玄米t) を踏まえた 需給見通し
7年産主食用米等生産量	B = C + D	747	
うち生産者ふるい目幅以上	C	718	
目幅未満のうち主食用への供給見込量	D	29	
7／8年政府備蓄米供給量	E	23	
7／8年主食用米等供給量計	F = A + B + E	925	243
7／8年主食用米等需要量	G	683	
8年6月末民間在庫量	H = F - G	243	
8年産主食用米等生産量	I	最小 中央 最大 735～745～754	最小 中央 最大 735～745～754
8／9年主食用米等供給量計	J = H + I	978～988～997	978～988～997
8／9年主食用米等需要量	K	693～711	693～711
政府備蓄米の買い戻し	L	—	21
9年6月末民間在庫量	M = J - K - L	267～285～304	246～264～283

注) ①事前契約による令和8年産備蓄米の政府買い入れは21万玄米t。これは上記「8年産主食用米等生産量」には含まれていない ②8年産主食用米等生産量については、8年6月末時点の水田における作付意向や10a当たり平均収量(5中3平均)、8月15日現在における10a当たり収量の平均比見込みを考慮して、幅をもって設定したもの。8月20日までの営農計画書等の変更を踏まえた水田における作付面積や作物統計の調査結果により今後変更される見込み ③政府備蓄米の売り渡し(全体で59万玄米t)にかかる備蓄水準の回復は、供給不足になる状況を避けつつ、適正水準に向けて着実に回復を図る観点から、令和9／10年以降も含め、今後、計画的に実施。急激な需給変動を避けるとともに、政府備蓄米の年産構成の適正化を図る観点も踏まえ、令和7年産米 21万玄米t(昨年度買い入れを中止した数量に相当)の買い戻しを進めるとともに、引き続き、今後の需給状況等を見定めた上で対応。また今後順次、基本指針第3の1(1)②の備蓄期間が経過している備蓄米を飼料用等の非主食用に販売 ④上記の見通しは、国内で生産された主食用米等の需給見通しであり、基本指針第4の2のSBS方式や枠外の民間輸入(令和7年度:約11万実t)による輸入米は含まれていない ⑤上記の需給見通しについては、今後の生産量や需要量の変動の把握に努め、必要に応じて柔軟に見直す。

周年事業民間備蓄 対策合計 59 万トに

925 万トの供給量（昨年 6 月末在庫 155 万ト＋7 年生産量 747 万ト＋備蓄米 23 万ト）に対し、需要量が 683 万トとなり、今年 6 月末の民間在庫は 243 万ト（前年比 88 万ト増）で確定。この在庫に、8 月 15 日現在の作柄情報から試算される主食用米生産量（最小 735 万～最大 754 万ト）を加え、8／9 年における供給量を 978 万～997 万トと算出した。

これに対し、需要量を前年より 10～28 万ト上回る 693 万～711 万トと予想。これを「十分な供給量」と見て、21 万トの備蓄米買い戻しを実施することから、来年 6 月末の民間在庫を 246 万～283 万トと見込んでいる。

仮に備蓄米買い戻しを講じなかった場合は、来年の民間在庫は、267 万～304 万トとなって 300 万ト超えもあり得る状況だった。これは、適正水準とされる民間在庫規模（180 万～200 万ト）を 67 万～124 万トも超過する事態だった。

ただし、21 万トの備蓄米買い戻しが買い戻し枠通りに無事実施されたとしても、民間在庫の適正水準を 46 万～103 万ト上回る過剰な状況は変わらない。

このため、需給表の欄外には▷長期計画販売（米穀周年供給・需要拡大支援事業）32 万ト▷民間備蓄実証 6 万ト——の実施を加え、買い戻し規模 21 万トも加え、59 万トの対策実施も挙げている。これは、昨年の備蓄米放出量の 59 万トとちょうど釣り合う形となる。

ただし、放出量と同等量を直接買い戻すわけではない。また、買い戻し予定価格も不明で、「相対価格の総加重平均での買い入れは可能性が低い 2 万円以下か」との観測も伝わる。

需要量を 24～61 万ト超

一部の出席委員からは、買い戻し実施について「タイミングが遅過ぎる。米価が下がり切ったからのタイミングになってしまっている」との批判や、「一定の評価はできるが、まだ（対象数量が）足りない」との指摘が挙がった。

前年よりも増加を見込む需要見込量（693 万～711 万ト）にも違和感が強い。この需要見込量を生産見込量が 24 万～61 万ト超過する見込みとなっている点にも注意が必要だ。需要量が減少すれば、超過数量はさらに膨張する。

同需給見通しを組み込んだ基本指針（米穀の需給および価格の安定に関する基本指針）は、諮問通り答申され、了承された。